

## 英語科を中心とした提言（若手 保彦 先生）

### はじめに

平成28年度は、教科指導員として小学校2校、中学校2校の計4校を訪問、参観する機会を得た。教科指導員としてまだ年数が浅く、「提言」を行えるだけの十分な知識や経験はもっていない。しかし、せっきくの機会であるので、訪問を通じて感じたこと、また、今後の取り組みの方向性について個人的に感じていることを英語教育に身をおく立場から述べたい。

### 学校訪問全体に関する感想

最も印象に残っているのは、どの学校においても、校舎ですれ違った児童・生徒が元気なあいさつをしていること、また、それが自然にできていることである。先生方の日々の粘り強い指導の成果であると思う。

訪問の際に行われる学校経営説明からは、それぞれの学校で独自の目標が定められ、校長先生のリーダーシップの下、その目標の実現に向けて組織として動く姿勢が印象に残った。一般授業参観についても、多くの先生方が工夫を凝らして児童、生徒をひきつけるような授業を展開しており、また、各教室で学習に集中できる環境が作られていると感じた。

### 特定授業のうち、特に英語および外国語活動の授業について

特定授業では、どの授業でも教師の努力や工夫を随所にうかがうことができた。また、児童・生徒と教師、児童・生徒同士のコミュニケーションが普段からとれていると感じさせる授業が多かった。

中学校の英語授業では、日本人英語教師がALTとうまく連携してALTの出身国の学校生活に興味をもたせるような導入を行ったり、生徒のコミュニケーションへの積極的な姿勢を教師が評価して意欲を育てたりしている点、小学校の外国語活動においては、教師が授業の大半を英語だけで行うなど、日本人教師が英語を話そうとする姿勢が以前に比べて積極的である点などが印象に残った。一方で、授業の後半、ペアやグループ活動の後で行われるクラス全体の前での発表活動に関しては、やや課題が残されている印象を受けた。よって今回は、発表活動を成功させるためにどのような取組を行ったらよいか、話し手が意識すべきこと、聞き手が意識すべきこと、環境を整える上で教師が意識すべきことの3点から述べさせていきたい。

### 発表活動に関する提案：話し手が意識すべきこと

発表活動に関して話し手が意識すべきことは、相手（聞き手）を意識することだろう。これは英語に限らず、また全てのコミュニケーション活動にとって共通する点だと思われる。では、「聞き手を意識する」にはどうすればよいのだろうか。基本的には内容と表現の2つに大別できるが、ここでは後者の表現について述べたい。

話し手が表現の面で聞き手を意識するという事は、簡単に言えば、聞き手の方を見て、反応を確認しながら話すことだと思う。しかし、この当然のことが授業では徹底されていないと感じる。多くの児童・生徒が聞き手に注意を向けず、原稿の紙を読み上げることに集中してしまっている。

この解決策として、「暗記して紙を見ないで話すように」という指示をする教師がいるが、実はこれには落とし穴がある。というのも、暗記では意識が記憶の再生に向いてしまうからである。結果、紙は見えていないが、肝心の目の前の相手も見えていないという状況に陥る。もし、暗記という練習方法を用いるのであれば、発表が気持ちの入った「自分の言葉」になるまで練習するよう指示した方がよい。原稿の紙にばかり意識が集中するのを防ぐ上で当面役に立つと思われるのは、Read and look-up (and say) の活動だと思う。テキストの音読を行う際は、文字から目を離し、相手を見て話すステップも入れ、話す時は相手の方を見る習慣を身に付けさせたい。このことは英語に限らず、他教科の授業でも徹底していただければ、英語の教師の負担は少なくなるので、ぜひ協力をお願いしたい。

### 発表活動に関する提案：聞き手が意識すべきこと

発表の際にもう一つ重要なのは、聞き手の育成である。いくら話し手が聞き手を意識す

るようになって、聞き手が下を向いてばかりでは、話し手が聞き手の理解の程度を確認することは難しい。Face-to-face communication においては双方の歩み寄りが不可欠であること、話し手の努力に対し、聞き手は視線や表情、頷きで応える義務があることを理解させたい。

#### 発表活動に関する提案：教師が意識すべきこと

発表活動を成功に導くために、教師は聞き手と話し手がお互いを意識できるような環境づくりをしなければならない。初期段階での環境づくりに関する具体的なアイデアを以下に述べるので、適宜取捨選択してほしい。

まず、「発表」という改まった形式をとる場合、聞き手が話し手の方に体を向けて座らせることを心がけたい。よくグループ活動の座席配置のまま発表させる場面を見かけるが、聞き手の顔が見えなければ発表者は相手を意識しづらくなる。また、発表者の顔が見えなければ聞き手も反応することが難しい。

次に、クラス全体への発表前に、各自で練習したり、ペアや4人グループの前で練習する機会を与えることも効果的だろう。残り時間が少なくなった状況で、グループで議論した内容を準備時間なしでクラスの前で発表することを求める授業をよく見かけるが、生徒は発表に対してこちらの想像以上の重圧を感じていること、また、発表に失敗すると、次への意欲が失われる可能性があることを心に留めておきたい。

また、次に発表する個人やグループを「聞き手」に含めず、発表準備に集中させることも検討してよいと思う。次に発表が回ってくるのが分かっている、聞くことに集中できる生徒はほとんどいない。その意味では、突然指名して発表させるやり方も最初は避けた方がよいと思われる。

最後に、発表活動の際、発表した生徒に「やってよかった」「またやってもいいかな」という気持ちにさせ、次の発表への意欲を持たせることも、活動の成功の重要な要素であろう。では、どのような時に生徒はそのような気持ちになるのか。おそらくそれは自分の発表が理解され、他人の考えを深める役に立ったり、パフォーマンスへの自信をつけたり、課題が明確になった時だと思う。活動の最後には、発表に対するフィードバックを与えたり、意味のある質疑応答を行うことを心がけたい。授業の計画を立てる際は、そのための時間も含めるよう留意したい。